

森と共に生きるまち宍粟の

みどりじまん新聞



Vol. 13

令和5年9月号



バックナンバーは
こちら

木育 過去ニュース

2015年3月
県内初認定
「森林セラピー基地」



里山の持続的な利用に向けて

研究者 栗蔭 尚弥

森林大学校に入学する以前、私は全く違う分野の仕事に就いていましたが、自然と関わる中で今ある自然を保全し後世に残していける仕事に就きたいという思いから、森林大学校に入学を決めました。また、入学後は授業の中で森林が持つ様々な機能や生態、樹木の種類等を学び、森林保全について研究したいという思いが強くなり、ボランティア活動に参加して森林を学ぶ機会も増えました。

今回は、市内にある県立国見の森公園において、授業の一環でスタッフとして里山勉強会に参加し、興味を持ったことについて紹介します。

●里山林の放置もたらすこと

里山とは、人が手入れし適切に管理されてきた山のことで、竹・アカマツ・スギ・ヒノキ・コナラなど様々な木が見られます。明治時代以前は薪や炭などの燃料、山菜等の食料、農業用の肥料・資材の採取など、様々な用途に利用されてきました。

里山林は20〜30年程度の間隔で伐採と樹木の再生を繰り返してきましたが、時代を経て利用が減り、定期的な伐採されなくなったことで、成長し過ぎたコナラ・ミズナラ林ではナラ枯れ【写真1】が起きています。



【写真1】ナラ枯れ
(出典：林野庁 HP、(一社) 日本森林技術協会)

ナラ枯れとは、カシノナガキクイムシ【写真2】という昆虫によって運ばれたナラ菌が原因で樹木が水を吸い上げることができなくなり、枯れてしまう病気です。本州の日本海側を中心にナラ、カシ等の樹木で発生しており、全国のナラ枯れ被害は、平成22年の32.5万㎡をピークに減少していましたが、令和2年は前年の約3倍、19.2万㎡と大幅に増加しました。兵庫県内でも、令和元年に多くの地域で報告され、その被害地域は拡大しています。ナラ枯れによって、樹木自体が倒れたり枝が落ちたりしてしまうほか、被害木は木炭やきのこの原木にも不向きとなるため、木材の価格も極端に落ちてしまいます。



【写真2】カシノナガキクイムシ
(出典：愛知県 HP)

ナラ枯れ被害木の 特徴 (見分け方)



【写真3】被害木の根元に見られるフラス
(出典：林野庁 HP、(一社) 日本森林技術協会)

ナラ枯れ被害木には、いくつかの特徴があります。

- 木の根元にフラス(カシノナガキクイムシが掘った木くず等)【写真3】がある
- 幹に直径約1〜2mmの穴がたくさん空いている
- 葉が茶色に変色し、落葉しない

こうした被害を減らすためには、伐採により樹木の再生を促進し、森林を若返らせることが必要になります。樹木を適度に伐採することで、森林内には太陽の光が射し込み、かつて里山にあった植物が復活し、昆虫や動物等にとって生育しやすい環境になります。しかし、成長し過ぎたコナラ・ブナは樹木が再生しにくい傾向にあるため、森林を若返らせることが難しいのが課題です。

「みどりじまん新聞」は

“木育”の視点を持って「森と共に生きるまち「しそう」」が誇る“みどり”の魅力を発信し、森や木に関心をもってもらうことを目的としています。発行にあたっては、「兵庫県立森林大学校」の学生が執筆し、学校での学びを生かして人と木や森林との関わりを伝えてもらいます。

●ナラ枯れ林の再生と食害対策

ナラ枯れ^がの跡地^{あとち}を再生する方法には、先ほど紹介したように、伐採^{はっさい}による樹木の再生や植栽^{しゅくさい}がありますが、植栽^{しゅくさい}にあたっては、シカなど野生動物による食害の対策を考える必要があります。

例えば、植えた木を食べられないようにするため、ウリハダカエデを植える方法があります。ウリハダカエデはシカに食べられることが少ないため、植栽^{しゅくさい}に適した木として知られており、森林大学校の樹木学実習の授業で訪れた国見山でも、何本も植わっている様子を観察することができました。ウリハダカエデの判別は簡単で、名前のとおり、幹に瓜^{うり}の様な模様【写真4】があるので初心者でも見分けられます。



【写真4】ウリハダカエデの幹

また、このような放置林の再生は、人里の獣害^{じゅうがい}対策としても効果的です。近年、野生動物が山を下りて市街地^{しやうがいち}に出没^{しゅつぱつ}し、農作物やゴミ等を荒らしたり、人に危害を加えたりするなどの被害^{ひがい}が増えています【写真5】。放置された雑木林は、クマやイノシシ等にとって格好の隠れ家^{かく}となるほか、ナラ類が成長し、実が多くなれば、餌場^{えさば}にもなります。放置された山林を整備することは、人里に出没^{しゅつぱつ}した動物を山に戻す効果的な手段です。



【写真5】ゴミをあさるイノシシ
(出典：神戸市HP「イノシシ被害対策」 ※画像一部加工)

●里山林の利用

里山林は、ただ再生するだけでなく、その後の利用方法も同時に考えていく必要があります。そのため、植樹にあたっては商品的価値のある広葉樹が植えられることも多く、例えば、コナラは椎茸^{しいたけ}の原木【写真6】、クヌギは菊炭^{きくすみ}(燃料や消臭^{しょうじゅう}、観賞^{かんしょう}用に使われる木炭)【写真7】として利用されます。また、クロモジ【写真8】は近年注目されている樹種で、ハーブとも呼ばれており、その枝や葉の成分には、抗ウィルス作用やリラククス効果、睡眠改善^{すいみんかいぜん}、免疫機能^{めんえききん能}の改善など様々な効果があるとされ、精油^{えっしゅう}、ハーブウォーターとして利用されています。薬酒として有名な「養命酒」の主成分もクロモジです。クロモジは、シカがほとんど食べない植物であり、食べられてもすぐ再生するため、伐採跡地^{はっさいあとち}への植栽^{しゅくさい}木として期待されています。



【写真6】椎茸の原木



【写真7】菊炭 (出典：のせ NOTE(能勢町観光協会))



【写真8】クロモジの葉

●まとめ

近年の大きなテーマであるSDGsの達成に向けては、持続可能な森林の育成を考えることが重要です。森林の育成には、適度な樹木の伐採^{はっさい}と木材の活用が必要ですが、最近では、森林が持つレクリエーション機能にも注目が集まっています。私自身、森林大実習で森林セラピーを体験し、森林の持つ心身への健康効果を実感するとともに、自然の良さやその価値に改めて気付かされました。



【写真9】実習での森林セラピー

森林の価値を知るとは、森林が生み出す商品の価格、森林に携わる人たちの雇用など経済面にも大きな好影響^{えいじょう}を与えます。まず私たちにできることは、里山にある樹木や林産物を活用し、その良さや価値を知ることではないでしょうか。

将来、私は林産物の加工に挑戦して、自然の良さや価値を伝えるものづくりをしたいと考えています。皆さんも身近にある里山やそこから生み出された林産物を通して、森林の大切さについて考えてみませんか。



専修学校
兵庫県立森林大学校
Hyogo Prefectural College of Forest Management

森林経営や森林林業に関わる
人材を幅広く育成する学校

【学校見学 随時受付中】



学校HP



中央市は「森林」を活用したまちの創造・SDGsに取り組めます